

仏教カウンセリングから見た家族関係

藤 田 清

仏教カウンセリング 仏教は元來教育体系であり、殊に教育方法体系であること、その方法の最たるものが応機説法であり、一人対一人のカウンセリングに帰着するということについては、すでに本研究第十九卷第一号の拙論において概観したところである。今その要点を摘記すると略次の如きものであろう。

釈尊成道の内容は縁起の法、殊に能所縁起であつた。その典型的なるものは、
是あれば彼あり、是生ずれば彼生ず。是無ければ彼無く、是滅すれば彼滅す。

のごとくであつた。釈尊は梵天の勸清によつて象徴せられるように、その内的展開によつて、成道直後には説くべからずとしたものを敢て衆生の為に説かざるべからずと決意し、そこに初転法輪となつた。その説法の特徴は、『スッタニパータ』に見る「わたしはこのことを説くということがわたしには無い」のであつて、聞手に応じて自由であり、相手の

立場に立ちながらその矛盾を明らかにしてゆき、聞手をしてその能所対存的立場を転換せざるを得ざらしめるものであつたと考えられる。

釈尊の能所縁起の法を中心として、その後の仏教、特に大乘仏教は展開していつた。その論理的側面から能所寂滅・能所転換を説いた中観、心理的側面から転識得智を説いた唯識は、歴史的には前後があるけれども、カウンセリングの立場からは、相俟つて実践的効用を發揮すべきものである。またからは、相俟つて実践的効用を發揮すべきものである。また唯識説と相前後して発達した如来蔵説も、これをカウンセリングの可能性の根拠と考えることができるのである。

実践体系としての天台教学 中国において一層具体化した仏教の実践体系の代表的なものに、天台大師智顛の四教・三観・四悉檀がある。

四教は釈尊一代の説法を藏・通・別・円に別つたものであるが、その根本原理は応機説法であり、その根底は慈悲にある。極めてカウンセリング的であるといわねばならない。

三観³は精しくは空・仮・中の三観であり、普通には一心三観といわれている。一心とは吾人現前の介爾陰妄の一心に外ならず、今の場合でいえば、カウンセラーとクライエントとを、対立的に把握する能所対存の一心であると考えることが出来る。対存的に把握すれば必ずから先住論か相応論かに帰着する。カウンセラーを能とすれば、クライエントは所となるが、その逆でもとより差支えはないわけである。従つて、カウンセラー中心の指示的方法と、クライエント中心の非指示的方法と、すなわち能取先住論か所取先住論、若しくはその折中としての相応論となる。しかしこれを縁起の法によつて批判すれば、能所は相依相待であり、生滅ともに同時にして平等であるから、カウンセラー中心もクライエント中心も成立せず、既に両者がないのであるから、それらの折中もまた無いのである。これを空観と見ることができよう。然しそれはカウンセラーもなくクライエントもないという意味ではない。カウンセラーもあり、クライエントもあり、そこにはカウンセリングが行なわれているのである。カウンセリングのあるところ、自ずからあるいはカウンセラー中心となり、あるいはクライエント中心となり、従つて折中ともなるであろう。しかしそこには固必がない。機に依じて宜しきを得るのであつて、これではなければならないとか、これであつてはならないなどということがない。これが仮観である。空

観が空に停まれば、却つて有に転じる。従つて空亦復空として能所に働かねばならない。仮観もまた有に停まれば妄有となる。仮が仮であるためには、常に空観と相伴わねばならない。この双照双運のところを中観ということができよう。しかし一心三観は飽くまで一心の上のことであつて、カウンセラーの基本的態度を確立させるにとどまり、社会的実践はこれを四悉檀に俟たねばならない。

四悉檀とは世界悉檀・各々為人悉檀・対治悉檀・第一義悉檀をいう。聞手の好むところに従つて説くのが世界悉檀、その善根を生ぜしめるのが為人悉檀、その悪病を除遣するのが対治悉檀、それらによつてその能所を寂滅せしめるのが第一義悉檀である。それはカウンセリング展開の順序とも考えられるが、第一義悉檀において能所が寂滅すれば、そこには自ずから自由無碍なる能所の転換があり、もはや順序を考えるまでもないであろう。

なお一心三観と四悉檀との関係は、これを止観の実践として、坐中修と歴縁対境修とすることができよう。

日本仏教と真俗の問題 日本仏教はその源を聖徳太子に発する。太子の仏教の特色は、摂政皇太子にして法王大王たるところにあり、従つて真俗の關係は極めて重要な意義を持つている。太子親撰の三経義疏の三経が、何れもこの問題を解明する經典であることは、太子の関心が何であつたかを明白

に物語っている。

太子の後、鑑真和上の渡来によつて、具足戒による出家菩薩僧を中心とする仏教が展開し、真俗の別は明確となつたが、やがて伝教大師最澄の出現とともに真俗一貫の大乗戒が提唱せられるに至つた。

最澄は太子を法華経の伝持者として尊崇したが、その大乗戒の提唱もまた遙かに太子と相呼応するものであつた。その後この真俗一貫の徹底として親鸞聖人の非僧非俗の自覚がある。聖人もまた太子を和国の教主と仰ぎ、浄土信仰の先覚として崇めたのである。

その後明治新政府によつて行なわれた「肉食妻帯蓄髮」の解禁は、親鸞系の浄土真宗以外の僧侶をも滔々として俗化せしめるにいたり、今や寺院仏教は化して在家仏教となるにいたつた。これもまた太子によつて始まる真俗一体の日本仏教当然の展開であるといえよう。今日の日本仏教は正しく在家仏教である。

新しい家の仏教 今日この仏教が依然として寺檀関係の上に立つ「家の仏教」であることには問題がない。しかし家族制度の変化にともない古来の家意識も流動化している現状にあつては、封建時代に確立した寺檀制度がいつまで現状を保ち得るか、誰しも疑問とするところである。仏教は本来一人を重視するものであつて、説法も本来は一人対一人のカウ

ンセリングであつた。今日のこの家族制度の転換期に際し、家単位の仏教を個人本位に切り換えねばならぬという提唱は、もとより極めて重要な意義を持つものである。

然し家の仏教は、果してこのまま消滅してゆくべきものなのであろうか、また消滅せしめてよいものなのであろうかということになる問題はまた別である。制度は時代とともに移つてゆく。しかし家の意識はそう簡単に変るものではない。ことに日本人の家意識の底に共通するものに祖霊信仰がある。仏教は渡来早々先ずこの民族精神の根底に根を下したのである。それが氏神とならぶところの氏寺となる。蘇我氏の向原寺、葛木氏の葛木寺、秦氏の太秦寺等皆然りである。一面葬式仏教とけなされながら、仏教は民族意識とその最深処で接触することによつて、日本仏教としてのエネルギーを現に保つているのである。

しかし戦後家族制度は急変した。男尊女卑の男系相統制は一転して、親子関係から夫婦関係へその重点が移つてゆくとともに、上下的秩序は左右的となつた。しかも産業が急激に大都市周辺に集中するにともない、農村は過疎化の一路をたどつていく。それはまた人々の大都市集中となり、核家族化の速度を早めてゆく。制度の変革、構造の変化は、当然家意識にも緩慢ながらも大きく影響しているのである。仏教はこの変動に対していかに対処すべきであらうか。そこに新らし

い家の仏教が問題となるのである。

核家族とは単に小規模家族の意味に止まらず、家族の始源的且根源的なあり方なのである。それは夫婦に始まつてまた夫婦に終る。その特色はもつとも夫婦中心的存在であるということである。しかも戦後この夫婦間の秩序が一変し、夫唱婦隨的、男子中心のあり方は遂次過去の遺物と化しつつある。然し新しい秩序が確立するにはなお年月を仮さねばならない。この摸索期こそ新しい家づくりの原理として、仏教が積極的に活動せねばならない時なのである。

一般的には男女相依つて夫婦となると考えられ、対存的に把握される。しかし縁起の法からいえば、夫婦は相依相待のものであつて、夫あれば妻あり、夫生ずれば妻生じ、夫無ければ妻無く、夫滅すれば妻滅すといふべきものである。従つて夫中心といふべきでなく、妻中心といふべきでもない。両者がなく折中もまたない。しかし夫がないわけでもなく、妻がないわけでもない。以上が空観である。夫があり妻があれば、あるいは夫中心のごとく、あるいは妻中心のごとく、また折中のごとくになる。それは「ごとくになる」のであつて、固必がない。これが仮観である。空は仮によつて空であり、仮は空によつて仮である、この双照双運のところに中観がある。このように一心三觀することによつて、あるべき夫婦関係、本来の夫婦関係が把握されるであろう。

仏教カウンセリングから見た家族関係(藤田)

その心中に確立された夫婦関係の具体的実践が、四悉檀による対話である。四悉檀についてはすでに前章で記した通りである。ただ今の場合、カウンセラーとクライアントとの対話ではなくして、夫と妻との対話である。しかし対話によつて能所の仕切りをとり、能所の転換が可能になることにおいては、全く同一視してよいであろう。この場合、夫婦間の対話は長い期間にわたる累積として考えられるべきものであつて、一朝一夕の対話に尽きるものではない。

このように考えてくると、この戦後の新しい家の仏教的あり方こそ、古い家の仏教と、その批判としての個人の仏教との総合として、通仏教的にまた日本仏教的に見て、あるべきあり方であるといえよう。わたくしどもは単なる郷愁的家族観にとらわれることなく、積極的に今日の課題に対処してゆかねばならないのである。

今日の核家族は極めて流動的である。曾ての家族のように安定したものではない。これに対処するためには、教化体勢そのものが、より活動的、より能率的でなければならぬことは、もとよりいまでもないことであろう。

1 「仏教カウンセリングと教育方法」(藤田清)―四天王寺女子大学紀要第三号。2 『仏教思想入門』(山口益著)―二八頁以下。3 「一心三觀の仏教カウンセリングの理解」(藤田清)―天台学報第十一号。4 「四悉檀の仏教カウンセリング的理解」(藤田清)―天台学報第十二号。5 『仏教カウンセリング』(藤田清)―は全巻この思想をもつて一貫しているが、ことに二―四頁以下。